中国がわかるシリーズ 33
澶淵システム（上）

ライフネット生命保険株式会社
代表取締役会長兼 CEO、出口　治明氏

北方を支配するキタイでは、6 代、名君聖宗（982～1031）が即位しました。西方では、チベット系のタングートが勃興していました。黄巣の乱で唐を支援し、李姓を貰って節度使に任じられていたタングートは、999 年、聖宗の呼びかけに応じて遼と同盟（実質は遼の支配）を結びました。

1004 年、聖宗が大軍を率いて南下すると、動揺した宮廷では王欽若などの南遷論が主流を占めましたが、硬骨漢の名宰相、寇準は、黄河北岸での迎撃を主張しました。臆病な 3 代真宗（997～1022）は、寇準に押し込まれ、恐る恐る北に親征したのです。寇準は、戦争に訴えるつもりはなく、講和を目論んでいましたが、そのためにも先ずは毅然とした態度を示す必要があったのです。

両皇帝の親征軍は睨みあいとなり、澶淵の盟と呼ばれる和約が結ばれました。これは、キタイを弟とし、宋は毎年、銀 10 万両、絹 20 万匹を贈るというもので、一種の ODA のようなものでした。キタイに渡った銀は、宋からの商品の買い付けに当てられましたので、結果的に宋の産業も潤うことになりました。

なお、平和維持の最大の功労者、寇準は、後に、王欽若の讒言（城下の盟、だとあげつらったのです）によって失脚しました。讒言を信じて中華帝国の権威を失ったと考えた真宗は、1008 年、玄宗以来、270 年ぶりに封禅を行って、権威を回復しようとしました（これが中国史上最後の封禅となりました）。しかし、この優れた条約によって、両国の間には、ほぼ 120 年にわたって平和が保たれ、両国は共に最盛期を迎えることになるのです。軍事の北と経済の南という南北分立システムは、それなりに安定したシステムとして、クビライによる統一まで約 300 年、続くことになるのです。

Copyright　ⓒI-O ウェルス・アドバイザーズ株式会社
発行人：岡本和久、発行：I-O ウェルス・アドバイザーズ株式会社
URL: http://www.i-owa.com；E-mail: info@i-owa.com